9月4日から19日まで、大阪・南港「ATCミュージアム」で開催される「水俣・おおさか展」。この水俣展にあわせ、日本が誇るドキュメンタリスト土本典昭監督の水俣映画3部作を一挙公開する。公害の原点とも言われる水俣病を、患者さんの側に立って撮り続けた土本典昭監督は『記録なくして事実なし』という名言を自ら実行し、数多くの水俣病作品を世に出し続けた。なかでも、『水俣～患者さんとその世界』(1971)『水俣一揆』(1973)『不知火海』(1975)は土本作品を代表する水俣病3部作である。さらに9月11日は、土本監督が制作したばかりの新作〈私家版〉『回想　川本輝夫』も特別上映。映画で水俣を撮り続けた土本典昭監督の世界に迫る。

『不知火海』

水俣·おおさか展 協賛企画

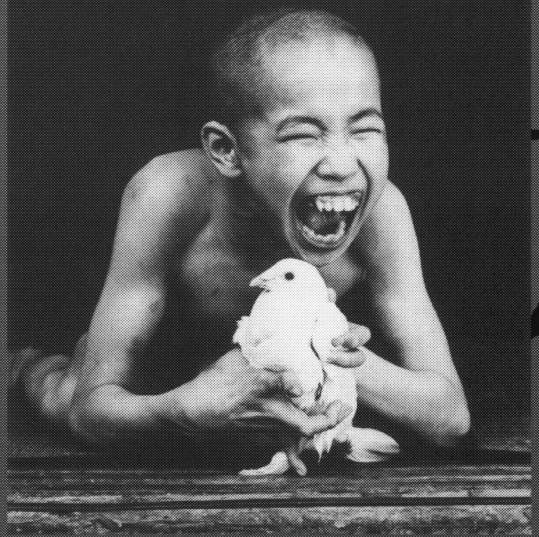
土本典昭監督・水俣映画3部作一挙上映!!

『水俣一揆～一生を問う人びと』

水俣

September 11 to 24 Ciné Nouveau Special Program.

特別上映〈私家版〉『回想　川本輝夫』


『水俣～患者さんとその世界』

水俣の四十四年を繰り返すのか我々は

9月11日
特別上映＋土本典昭監督来館!!

私家版『回想　川本輝夫』

（1999年8月1日/42分/ビデオ）

◎製作：土本典昭、青木基子、丸岡秀樹
◎監督：土本典昭
◎素材協力：青林舎、東京・水俣病を告発する会

私家版『回想　川本輝夫』について
土本典昭（映画監督）

ひとりの庶民が命がけで汚染企業のチッソと、長年それを見逃していた国・県と戦った。それが水俣病運動の指導者川本輝夫さんである。彼は今年2月に急逝した。ニューヨークタイムスにまで報じられた世界的な人が水俣では孤独だった。享年68歳。まだ死ぬとは思わずに最後まで水俣の記録を残すために奮闘した。最後の言葉は「水俣湾を世界遺産に」（水俣市議会にて、98年12月）という壮大な提案だった。その半生がほぼ映像に記録され残ったのは稀有なことであろう。世界に環境の破壊がある限り、水俣病事件の歴史とその渦中を生きた川本輝夫さんの足跡は辿られ続けられるにちがいない。

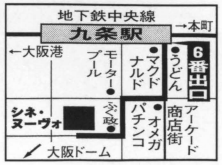
上映各回
一般1300円、大学1100円、
高校・中・小・シニア1000円　2回券2000円
水俣・おおさか展のチケット及び
半券ご提示の方は1000円

シネ・ヌーヴォ

TEL 06-6582-1416

大阪市西区
九条1-20-24

地下鉄中央線
「九条駅」6番
出口 徒歩2分



苦海浄土の世界－水俣病患者、
家族の日々を克明に記録した傑作

『水俣－患者さんとその世界－』

（1971年／120分／東プロダクション）

◎製作：高木隆太郎　◎監督：土本典昭　◎撮影：大澤幸四郎　◎録音：久保田幸雄、浅沼幸一

1973年度（第1回）世界環境映画祭グランプリ／マンハイム映画祭デュキャット賞／1972年度ベルン映画祭銀賞／ロカルノ映画祭第3位／優秀映画鑑賞会年間第3位

水俣病。今から43年前（1956年当時）、奇病といわれ、伝染病か中毒かもわからなかった。不知火海に36年間にわたり、チッソが流してきた有機水銀が水俣病の原因と公式発表されるまでに13年を要した。その間、チッソはまったく研究に協力しないばかりか、さまざまな原因説を発表あるいは支持し、原因究明をひきのばした。公式発表後も依然として責任を認めなかった。患者とその肉親たちは自らむち打って裁判に、デモに立ち上がらざるをえなかった。

この映画は1969年、チッソを相手に裁判を起こした29世帯を中心に、潜在患者の発掘の過程を描いている。カメラは鹿児島県出水市の夫婦船の描写から始まる。肉親の記憶にのみ残された事実から水俣病患者の実態が明らかにされる。しかし、水俣は“チッソ城下町”。患者さんは孤立を強いられる。厚生省への救済申し立ても一喝される。

裁判を契機に熊本県にようやく発した告発運動が全国に支援の輪をひろげていく。患者自身による裁判闘争へのカンパ活動、訴え、一株運動、そして大阪でのチッソ株主総会での患者と社長の対話へと運動はもりあがる。

最後にカメラは胎児性患者に向けられる。病院には半ば見捨てられるが、家族に見守られ、輝くばかりの人間の営みがフィルムにとどめられている。

この映画の撮影当時、患者総数121人でしかなかったが、撮影の結果、約1万5000人の申請者の発現につながった。この映画が運動の歩み出しとしての記録になっている。また、監督土本典昭にとって、水俣病への本格的取組みの第一歩となった作品でもある。

チッソよ苦海の声を聞け！時に激しく、
そして漁りの心をもって迫る患者たちの群像

『水俣一揆－一生を問う人びと－』

（1973年／108分／青林舎）

◎製作：高木隆太郎　◎監督：土本典昭
◎撮影：大澤幸四郎、高岩仁
◎音楽：真鍋理一郎　◎ナレーター：宮沢信雄

土本監督の水俣第2作。1973年3月20日、熊本地裁は患者の訴えを認め、チッソに慰謝料の支払いを命じた。チッソに初めて加害者責任があることを明らかにした判決であった。その後、ひきつづきチッソ本社（東京）で直接交渉がくりひろげられる。この映画は交渉にあたる患者の行動を追う中で語られる、きわめて資料性の高い証言の記録である。

「死ぬまで面倒をみてくれろ」と誓約書への署名を求める患者。慰謝料分は払うが、あとの要求は会社の体力（資力）からいって呑めない」とつっぱねる会社側。しかし「なして今まで患者ばだましてきた。もとのからだに戻してくるれば金は一銭も要らん。人は何のためにうまれてきたち思うか」と問いつめる患者に、ついに署名し土下座する。

被害者と加害者が初めて交渉したこの翌日から3ヶ月半、チッソ本社を舞台に生涯の医療と生活の保障を求めて交渉が続く。新認定患者を軽症とみて低額の金でことをすませようとする会社の意図が暴露される。認定されないまま死んでいった患者の解剖例が明らかにされる。若い胎児性患者のことを問う女性患者、水俣病のため離婚された子もちの婦人たちの声、声、声。

「あんたも人の親じゃろ。何を信心しとられるか、座右の銘は何ですか」とつめよられた社長の表情が凍り付く。会社の防御は固いが患者たちは全力を尽くしてその一角をつきくずしていった。

なお、この映画では初めてシンクロ録音（同時録音）が使用され、緊密な映画構成を成立させている。

人も病む、魚も病む、
病者どうしの生きものの世界

『不知火海』

（1975年／153分／青林舎）

◎製作：高木隆太郎　◎監督：土本典昭
◎撮影：大澤幸四郎

不知火海の人と生活、漁業は静かに営まれている。あらゆる牧歌的な漁法がここにはある。うたせ漁法、定置網などは海の畠のようだ。水俣病も遠い噂でしかないかのように見える。

しかし現実には水俣には日々悪化し貧窮する申請患者がいる。同じ部落に残酷なまでのアンバランスも生まれている。すでに“救済”された患者が家と生活を一新したからだ。しかし、その“御殿”と呼ばれる家は、先の読めぬ患者の、今の苦しみを忘れるためだけの自由と楽しみが具現化されたものにすぎない。子孫がわが子でたえるのを見透かした親の苦悩がそこにはある。

青年期を迎え、愛や恋に体のうずく胎児性患者。魚の生まれ変わりと信じ、海の埋め立てに自身の埋葬を感じる若い母親の患者。「脳を手術したら治らないか」と生まれて初めて治療の可能性を訪ねる胎児性の少女に答えることのできない医師。「明水園」（水俣病患者だけを収容する施設）も陸の孤島のようだ。

そして、水俣の対岸には、920ppmという人類最高の毛髪水銀量で倒れた死者が見い出されながら、数年手をつけられていない空白地帯がある。御所浦島など医学上の“暗黒の島々”である。

カメラはその海辺の暮らしを映し出す。自然のままに魚をとり、食べ、静かに生きる人々の姿。しかし、20年ぶりにカキが海岸につき、魚影が見られるようになったとはいえ、海はまだ汚染されている。その海で盛大なフグ漁が始まった。この地では今、新たなる“水俣の時代”が幕を開けようとしているのだ。

土本典昭監督・水俣映画3部作一挙上映スケジュール

9月	11（土）	12（日）	13（月）	14（火）	15（水）	16（木）	17（金）	18（土）	19（日）	20（月）	21（火）	22（水）	23（木）	24（金）
	↑	『水俣～患者さんとその世界』 A.M. 10:15 一回上映（12:15終了）				『水俣一揆～一生を問う人びと』 A.M. 10:30 一回上映（12:18終了）				『不知火海』 A.M. 10:15 一回上映（12:48終了）				

11日〈私家版〉『回想　川本輝夫』上映と土本典昭監督のおはなし A.M. 11:00～